
アニマクリエイト

交わらない世界

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アニマクリエイト

【Nコード】

N1746Y

【作者名】

交わらない世界

【あらすじ】

ただ目的もなく、だらだらと研究や従者といちゃいちゃする物語。

ゲーム系は自キャラ憑依が多いような気がしたので書いてみた

1話

万物召喚の書、それが俺の探していたアイテムだ。

いきなりこんなことを言われても意味が分からないだろうから最初から説明する。

まず、俺はとあるゲーム、『アニマクリエイイト』というゲームにハマったのが原因だ。

このアニマクリエイイトというゲームは、自キャラのクリエイイトが自分で出来るのだが自由度がとにかく高い。

これは、心理学などでいわれるアニマ、分かりやすい例で言えば理想の女性像として現れる、と言われているそれを表現しようというのだから、かなりの自由度を誇っているわけだ。

そして俺は、自キャラを作るのに12時間かけて自キャラを作りを上げた。

作り上げた自キャラ——ユースティティアとなずけたのだが——を使い、レベルを上げ、時には仲間をクリエイイトして、攻略していった。

ゲーム内のレベル的には2000以上いけば全てのステータスがカンストする。一応最高レベルは9999だ。

これは、元々このゲームはお気に入りキャラを作りそれで冒険するというゆるいゲームだからだ。

そのためコアなゲーマーはほとんどいない、そして俺は3年前、5年掛けてこのゲームで自キャラのレベルをカンストさせた。

そのときに出てきたのが万物召喚の書を手に入れろ、というクエストだ。

それから3年間探して手に入れたのが、万物召喚の書というわけだ。

「ふー、終わったな、でも、このアイテム何につかんだろう？
Wi〇iには情報がなかったしな」

そんなことを呟きながら画面を見る。
すると、画面が勝手に動き出し、万物召喚の書を使った。

「え？　なんで」

そこまで、いった時に画面から光があふれ俺の意識は途絶えた。

「……方が、……の、主様」

声が聞こえる、途切れ途切れではあるが心地よい声だ。
主様？　何のことだ？

「ふむ、我より、少し大きいぐらいかの？」

次は、鈴を様な声、なんとも変わった喋り方をする子だな。

「主様、力ない……？」

平坦な、それでも心配しているのが分かる声だ。
そろそろ目を開けよう、このままじゃあ、状況が分からない。

「んっ」

眩しい、どうやら日が差し込んでいるようだ。

「主様、おはようございます」

最初に聞こえた、心地よい声が聞こえてくる。

誰だ？ は？ いや、待て、ど、ということだ、な、何で？

縁がレースになっている黒い目隠しをし、メイド服を着ているそして、流れるようなウェーブのかかった金の髪、手には手袋をつけているが甲の部分が開いている、それぞれの甲には、左手の甲には天秤の刺青、右手の甲には剣の刺青が描かれている。
身長は高い、確か175ぐらいに設定したはずだ……現実逃避は止めよう。

「これは、ということだ？」

「はい、ご説明させていただきます、主様」

「わかった、でも、その前に確認をいいか？」

確認をしておきたいことがある。

「はい、主様」

「聞くが、お前はユースティティアか？」

そうそれが問題だ、もしそうなら

いや、間違いないだろう、正義の女神をモデルに作った、俺の自キャラ。

「はい、間違いございません、主様」

どうやらこれはあれだな、異世界に飛ばされたというやつか……

「そうか、俺の名前は佐々木 明人だ、明人と呼んでくれ」

「はい、アキヒト様」

「それじゃあ、今の状況をなるべく分かりやすいように説明してくれ」

「はい、それでは、まずアキヒト様も気づいていらっしやるでしょうが、この世界はアキヒト様のいた世界ではありません」

最初っからぶっ飛ばしてくれるね。

「そっか、それじゃあ、ここは？ もしかして、『スピリットワールド』か？」

スピリットワールド、アニマクリエイトの世界の名前だ。

「いいえ、違います、この世界はアキヒト様のいた世界でもなく私共がいた世界でもない異世界です」

この世界に飛ばされた原因ですが、おそらくアキヒト様の世界と私共の世界があまりにも遠かったのが原因かと思われます」

「なぜ、遠かったことが原因なんだ？」

「はい、私が使った万物召喚の書を覚えているでしょうか？」

あれは、どんなものでも召喚すると言われている書です、私共はそれによって主様を召喚しようと思いました
ですがあまりに遠く、力が足りなかったので主様の世界から限界まで私共の世界に近い世界に召喚し、そこに私共を召喚したのでしよう」

つまり、移動距離が長かったから俺を移動できるところまで移動させて、俺を移動させたところにユースティティア達を移動させたってことか。

「俺は、帰れるのか？」

「難しいかと」

「マジかよ」

「別に帰らなくてもよろしいのではないのでしょうか？
アキヒト様は、私共の世界に來たいと常々言っていましたではありませんか」

確かに、あっちの世界よりは生きやすい……のか？

「そう……だな、あ、そうだ、名前、ティティーって呼んで言いか？」

ユースティティアって長いんだよ。

「はい、構いません、むしろアキヒト様に愛称を授かるなど望外な幸せです」

にこり、と微笑んでティティーが言う。
笑顔も似合う、もっと笑えばいいのに、さて、これからどうするか。

「それは良かった、それでこの世界はどんな感じだ？」

「はい、どうやら私共の世界に近いようです

ブンデイーの調査では北に10キロのところに王都があり、ギルドも迷宮もあるようです

いま私共がいるのは間に合わせですが、簡単なログハウスです」

ギルドや迷宮もある、生活には困らないかな、ティティーたちが
いれば遊んで暮らせるだろうし。

でも、まだまだ調べなきゃいけないこともあるだろう、例えば
ティティー達は自分達の世界では最強だったが、この世界では？

「ブンデイー、ちょっといいか？」

「ディーって呼んで、主様？」

小さな影が音もなく近づいてくる、さすが忍び、気配が希薄だ肌
は白く日に当たったことはあるのかというほどだ。

「あゝ、分かった、それで、ディーお金は使えそうだったか？」

気になるところではあるだろう、ティティーたちの世界に近いな
らティティーたちの世界の金が使ええる可能性は高い。

「遠目だったから、確実ではないけど、大丈夫だと思う」

「そうか、分かった、ありがとう」

頭をなでてやる、ディーは背が低い確か130だったかな。

「ぬう、主よ、ずるいではないか妾もなでて欲しいぞ」

そういつて出てきたのは、豪奢な鎧をまとった少女だ。

真っ白なきれいな髪、肌も白く、目が黄金色に輝いている、この子は聖騎士《パラディン》の。

「アリスティンか？」

「そうじゃ、それ以外の誰に見える？ それから妾は愛称では呼んでくれんのか？ 妾も主の作った、十二傑作の一人じゃぞ？」

十二傑作？ ああ、そういえば、俺が直接作ったのは十二人だけだからだな。

それ以外はネット上の気に入ったやつをアレンジとかして使わせてもらった。

「それじゃあ、アリス、アリスもなでてやろう」

そういつて、アリスをなでる、ここで違和感、なんだろう妙に自分の手が小さく感じる。

いや、まさか、いやいや、そんなわけ

「ティティー、か、鏡はあるか？」

今日は確認ばかりだなー、H A H A H A H A H A

「はい、こちらに」

ティティーに鏡を手渡される。

鏡に映るのは……男の俺、だが、若返っている？

多分15、6才の頃ぐらいだろうか、懐かしい限りだこの体になる前はギリギリ20代だったしな。

「アキヒト様、どうかなさいましたか？」

心配そうなティティーの声が聞こえてくる。

「いや、なんでもない、そういえば、フェリユハイトやアルファルスとか、他の十二傑作は？」

今いるのは、ティティー、デイー、アリス、ただだ他の九人はどうなっている？

「他の九人は、この世界の探索に出てもらっています
幸いマッピング機能がありますので散らばらせて地図を作り上げています

今のところ報告としてはアルファルスが海を渡り大陸を見つけたと報告が上がっております
位置からしてもしかすると私共の世界と似たような形をしているかもしれません」

「地図か、あっても困らないけど、他のやつらはいつでも集められるのか？」

何が起こるかわからないからピンチになったらすぐ来れるようにしておいて欲しい。

「問題ありません、これがありますので」

そういつてティティは万物召喚の書を見せる。

ああ、確かに世界も超えることが出来る本ならすぐに召喚できるだろう。

「そっか、それじゃあ、これからどうしよう？」

「アキヒト様の好きなように、私共はアキヒト様についていきます」

そういつて、優雅にお辞儀をする。

ネタ職業とはいえだったとはいえ流石メイド、職業なんて関係なくどうせカンストするなら何でも良かったんで選んだのだが、正解だったようだ。

「うーん、それじゃあ、まずは情報収集をしよう、ディー頼んでいいか？」

「任せて、情報収集、得意♪」

ディーは薄く笑う、かわいいぜ。

「それじゃあ、やって欲しいことをいつておく、まずは、この世界での冒険者のレベル、それから、ディーたちの世界のお金が使えるか、この二つを調べてきて欲しい」

この二つ特に後者が分かれば、それなりにどうとでもなるだろう。それが分かればこの世界の人間のレベルが高かろうが低かろうが密やかに生きることが出来るしな。

「分かった、いってくる」

そういうと、デューは部屋から消えた。

やっぱり見えないか、当然だな、そういえば俺にもレベルとかあるのだろうか？

まあ、今はいいか、デューが情報を持って帰ってくるまでゆっくりしよう。

1話（後書き）

妄想がとまらない、もうひとつの方もこっちも最低でも1週間に一回は更新したいと思います。

2話

ディーが、情報を持って帰ってきた。

「報告、冒険者のレベル、低い、一番高くて200レベル、50レベルでも高いほう

お金は普通に使えた」

「迷宮の攻略のほうはどうなっていた？」

アニマクリエイトでは迷宮攻略は階層の倍以上のレベルが必要になる。

「向こうと同じだった、冒険者のレベルも、私達の世界と同じ、基準で考えていい」

ふむ、どうやら穏やかに過ごせそうだな。

「アキヒト様、大陸の個数が確定しました
数は9つ、私達の世界に近い形をしているようです
そしてモンスターについてですが、新種と亜種が確認されました」

「強さは？」

「たいした事ありません、1500以上あれば楽に勝てます」

1500以上ってそれは、たいした事ないとは言えないんじゃないのか？

でも、ティティーからしたらたいした事がない相手なのだろう。

「そっか、うーん、それはもういいや、それで150レベルぐらいの子を王都に送って冒険者になってもらおうと思ってるんだけど、どう思う？」

150だったらそこそこまでいけるだろうし、それなりに儲けてもらって家を建てようと思っているのだ。

「なぜでしょう？」

「俺達ってこの世界の人間じゃないだろ？ だから、立場とかそこら辺を確立するには冒険者からなら楽だろ
家とか買うのも、高レベルの冒険者ならそれなりに融通してくれるだろうし」

「それでしたら、アリスティンなどのほうが宜しいのではないですか？」

「あー、いや、そんなの目立ちすぎるだろう、俺はしばらくゆつくりしたいし、実力が高すぎたら面倒ごとに巻き込まれそうだ」

魔法なんかもあるだろうし、それが使えるか実験とかしたいし

「分かりました、それではステイファンを召喚して王都に送ります」

ステイファン、えっと、確か騎士だったかなレベルは150、オリジナルじゃないけどそれなりに俺が手を加えたやつだな。

そういえば、サポートキャラのレベルは課金でレベルの上限が決まるがこの世界でもレベルの上限とかあるのだろうか？

まあ、それを試す意味でもちょうどいいか、レベルが上がるなら

それはそれで楽しそうだし。

「うん、それじゃあ、それが終わったら俺が魔法を使えるか試してみたいから、その実験に付き合って」

「む、主よ、それは妾にさせてもらえぬか？」

そういうアリス、そしてそう発言をしたアリスに目を向けるというより睨むティティー。

「そう睨むな、ユースティティア、我だって、主に構って欲しいのだ」

あゝ、そっか、ティティーとばかり話しててアリスとはあまり話してないからな。

それを聞いたティティーも少し納得し、睨むのを止める。

「うゝん、それじゃあ、アリスに頼むよ」

「うむ、この妾がしっかりと主に魔法を教えよう」

魔法、魔法、楽しみだな。

そんなことを思いながらベットから降り、アリスに連れられて外に出る。

アリスに外に連れ出され家の近くの森の開けたところまで案内された。

「うむ、それでは、最初は魔力を目覚めさせるぞ」

「魔力を目覚めさせる？」

「そうじゃ、主は魔力を感じれないじゃろ？」

魔力を感じるには長年の精神修行か魔力を持つものによってその魔力を目覚めさせてもらうしかないのじゃ」

「ふむふむ、魔力を目覚めさせるのはどうするんだ？」

「こうやるのじゃ」

そういつて、アリスは俺の手を握る。

なんか暖かい物が流れてくる、むむ、これが魔力ってやつか？

「わかるかの、今魔力を送っておるのだが」

「分かるぞ」

「それじゃあ、今、流している魔力と同じような感覚がないか体の中を探るのじゃ」

体の中を探る、うゝん……お、これかな、へそより下、いわゆる丹田というやつだろう。

そこにあるのが分かる、自覚した瞬間、体の中をめぐる様に動き始めた。

「どうやら見つけたようじゃな」

「ああ、でもなんか頼りない感じだな」

力を感じるのだが、あまりにも小さいように感じる。

「うむ、それも仕方なからう、主はまだ目覚めたばかりなのじゃない」

「そっか、魔力を上げるならレベル上げしないといけないのかな？」

もしそうなら、モンスターと戦うことになるのか。

戦えるだろうか？

「そうじゃな、それについては後にするぞ、今は魔法じゃ」

アリスはちらりとティティのほうを見てそう言った。

「それもそうだな、魔力が目覚めたらすぐに魔法は使えるのか？」

「問題ないと思うぞ、初心者ならまずはランプの魔法からがよいかの、それじゃあ見ておれ、主」

《ランプ》

そうアリスが呪文を唱えるとアリスの右斜め上に光の玉が出来る。ランプは洞窟などで光源を確保するのに使われる初級魔法だ。

「魔法はイメージからなる、そのため実際に魔法を見て発動すると発動させやすいのじゃ

主もやってみるとよい」

「それじゃあ」

《ランプ》

俺の右上に光の玉が出来る、が、弱弱しく光るだけだ。
なんだか物悲しくなっていく、そしてだんだん小さくなっていき、
消えた。

「なんか疲れた」

体の中から魔力を持っていられるってこんな感じなのか。
脱力感が半端じゃない、もう動きたくないって感じた。

「うゝむ、主は魔力がそんなに高くないようじゃな」

「……ル……だ」

「ん？ 主、何か言ったか？」

「レベル上げるぞー！！！！」

魔法は使えるには使えた、でもこんなじゃ詰まらん、もっとましに使えるようになるようにレベル上げをせねば。

「む、レベル上げか？ それはあやつが許してくれるのかのう？」

そういった、アリスが目を向けるのは、ニコニコと微笑んでいる
ティティー、そのティティーが近づいてくる、そして俺を抱きしめる。

「アキヒト様、そのような危険なことをする必要はありません、ど

うか自身をご自愛くださいませ」

「いや、でもな、男としてはこういうことに興味があるというか、知的好奇心が沸くというか」

この世界に来る前は年齢Ⅱ彼女いない暦だったのでこんな美女に抱きしめられて、その匂いとかやわらかさにあたふたしてしまう。

「知的好奇心ですか、それでしたら、魔術などはどうでしょう？魔法はどちらかといえば理論に沿って使うものではないですから」

「魔術？」

アニマクリエイトには魔法はあったが魔術はなかったはずだ。

「はい、これは、アルファルスからの報告ですが、魔術は私共の世界にはなかった理論でありますがこの世界の理にかなった力の行使が可能との報告がありました」

ふむ、つまり、魔法は理論に沿って使うものではないが魔術は理論に沿って使うものなのか、確かにそれは面白そうだ、だが

「結局、レベル上げは必要なんじゃないか？」

魔術を使うにしても魔力は必要だろう。

「大丈夫です、魔術はパスと呼ばれるもので従者などから魔力を吸い上げることが出来るそうです

です、私とパスをつないでくださればいくらでも魔術の行使が可能になります」

「おお!!　すごいな、それじゃあ、そのパスをつないでくれ」

「分かりました、それでは」

ティティーがそういうと、地面には二重の円が描かれその中に凄まじい速度で何ともいえない文字がびっしりと描かれていく。

そして、二重になっている円の外円と内円が逆に回り始める、すると、体の中に何かが入ってくるのが分かった。

それが俺の体の中——丹田らへん——にある魔力にくつつく、体の中にティティーの魔力が流れ込んでくる。

「あゝ、ティティーもうちょっと魔力を弱めてくれないか？
なんといか、こう……体が熱くなる」

魔力供給というのは結構気持ちいいものかもしれない、こう、体に力があふれる。

でも、これは危険な力であろう、少し気持ちがふわふわして力に酔いしれそうになる。

暴力とは無縁の平和な世界で育ってきたからか、一瞬でも力任せに全てを叩き潰して蹂躪したいと思った自分に嫌悪感を持つ。

「申し訳ございません、大丈夫ですか？」

ティティーは俺から少しはなれそう聞いてくる。

「うん、大丈夫、そろそろ暗くなってきたし、少し家に戻ろう」

「はい、分かりました」

そうして俺は家に戻った。

「はあ、魔力供給は便利だけどあんまり吸い上げすぎると、テンションが上がって大変なことになりそうだな」

家に戻り、自分の部屋のベットに腰かけて独り言を呟く。

コン コン コン コン

「開いてるぞ」

「失礼します」

入ってきたのはティティーだった。

「どうかしたのか？」

「はい、アキヒト様、魔力供給の事です、魔力供給時に気分が高ぶることを嫌悪していたようなので、気分を高ぶらせないで魔力供給できる方法があるのですが」

「気づいていたのか、それで、どんな方法だ？」

魔術の実験をするたびにあんなテンションにならなくていいなら大抵のことは受け入れよう

「はい、それは……」

「それは」

ゴクッ

「私と契りを結ぶことです、そうすればパスがかなり安定しますの
で魔力の微調整が出来ますので」

へえー、ティティーと契り？ を結ぶことかー、契りってあれだ
よね、あれ、確か約束とか誓いって意味だよね。

「えーっと、それは約束とか誓いのほうの契りか？」

取りあえず聞いておく、意思の疎通は大切だからな！！

「いいえ、男女の交わりのほうです」

そっか、ティティー何でそんな怖い目してるの？
獲物を狙う、動物のようだよティティーその迫力は怖すぎる。

「ティティー落ち着こう、ほら深呼吸」

「申し訳ございません、アキヒト様、罰は受けます」

そういつて、ティティーは俺の肩を押してベッドに押し倒す。
手や足をバタバタとさせて暴れるがティティーはぜんぜん動じな
い、これがステータスの差というやつだろうか？

「かわいらしいです、そのように暴れて、でも、大丈夫です
気持ちよくさせてあげます、ですのであまり暴れないでください」

そういつて、俺の手をつかみ、片手で俺の両手首を束ねる。
ティティーの顔が近づいてくる、甘いにおいがする、魔力を少量
ずつ流し込まれ、頭がくらくらする。

「大丈夫です、全てお任せください」

「う……ん？」

目が覚めた、昨日何か凄い夢を見たような気がする。

「アキヒト様、昨日は誠に申し訳ございませんでした
いかなる罰でも受けるしだいでございます」

いきなり、ティティーが謝り始めた。

「ど、どうしたのティティー？」

「昨夜のことを覚えてないのですか？」

昨夜、昨夜、そ、そういえば、押し倒されて……えっと、それか
ら、それから？

「えっと、よく思い出せない、凄く気持ちよかったとは思いつける
んだけど」

「ああ！！ 申し訳ございません、アキヒト様、罰を、罰をお与え
ください！！！」

ど、どうしよう、かなり自分を追い詰めているようだ。

「ティティー膝立ちをして」

「はい」

ティティーはすばやく膝立ちになる。

顔は下に向けている、ティティーに近づき、ほほに手を添えてこちらを向かせる。

目隠しによって、目はあわせれない、顔を近づけ少し唇に当てる程度のキスをする。

「ティティー別に俺は人形が欲しいわけじゃない、命令で動く人形じゃなくて常に自分で考え動ける人間になれ」

最初は、ゲームのキャラで何でも出来ると思っていた。

でもちゃんと、感情とかどうしようもない気持ちとかがあって、それは俺と変わらなくて人間らしい気持ちだ、自分の感情を殺して人形になるのはつらいと思う。

だから、人間としてその気持ちに沿った行動をして欲しい。

「今回の契りについては、パスによる魔力供給時の感情の高ぶりがほとんどなくなっているのが分かるから、罰はなしだ」

「はい、アキヒト様、ありがとうございます、私は常に自分で考えアキヒト様を喜ばせれるようより一層努力します」

頭を下げお礼、そしてそのまま宣言をするティティー、いや、俺のためだけじゃなくて自分のためにも努力してね。

俺は、そう言おうと思ったが、満面の笑顔を浮かべるティティー

には言いづらかった。

3話

ティティーとの話が終わり食事に向かった。

食事が終わった後でアリスに昨日のことを問い詰められた。

主の部屋で異常な魔力の奔流が起こったが、なんだったのかと。

「いや、まあ、色々あったんだよ」

誤魔化すことにした。

「こっちを見て言うのじゃ、主よ」

目が泳いでいたのがばれたらしい、ティティー助けて!!

そう、ティティーにアイコンタクトを送る。

「アリスティン、昨日のアキヒト様の部屋での魔力の奔流は私とアキヒト様が契ったことによって起こっただけです」

あれ？ 言っちゃうの？ それ言っちゃうの？

「な、なんじゃと!! どういうことじゃ、主!!」

アリスは俺の肩を持って、前後に揺らす。

やめて、揺らさないで戻ってくるから、食べたものが口から出ちゃう。

「お、おちついて、昨日のはパスを安定させるためにやっただけで」

俺がそういうと、アリスは俺を揺らすのをやめて、ティティーを

睨み始めた。

「我はそんなこと聞いてないぞ、ユースティティア！」

「それは、言ってますんから」

二人の間に険悪な雰囲気が漂う。

「えーっと、二人とも落ち着いて、喧嘩はよくないよ？」

「む、むむ、じゃが主、ユースティティアとだけ契りを結ぶのは妾だけじゃなく他のものも納得しないと思うのぞ？」

「そういうものなのか？」

よく分からんぞ

「そういうものじゃ、ブンディーよ、お主もそうじゃろ？」

「私も、主様と交わりたい」

急に現れたディーが無表情でそういう、いや、かすかに白いほほが赤く染まっている。

「まあ、この通りじゃ、そこで提案するのじゃ、まず序列順に主が契っていけば全て解決すると思うのじゃ」

「序列？」

「十二傑作を強い順に並べた順番じゃ、それに序列順に呼び出すこ

とによって主が全員と顔合わせが出来るのじゃ、この案はともいいと思うのじゃ？」

確かに顔合わせにいいかもしれないけど、その、やるんだよね？
いや、男としては気持ち良いしいいのだが。

「あゝ、そういう話はまたにしよう、俺は折角パスが安定したんだから魔術をやりたいのだが」

「む、分かった、しかし、魔術は誰が教えるのじゃ？ 妾としては魔法を教える代わりに妾が教えたいところじゃ」

「うん、俺はそれでも構わないけど、アリスは魔術使えるの？」

向こうにはなかったから、使えないかと思ったんだけど。

「ユースティティアからある程度は聞いておるし、分からなければ、アルファルスに聞けばよい」

アルファルスは魔法使いだ、確か海を渡って大陸を見つけたって言ってたっけ。

「アルファルスは今どこにいるんだ？」

「報告では、他大陸のアカトリエルと呼ばれる王国で魔術について調べているとの事です」

やっぱり魔法使いだからそういう事に興味があるのかな？ アカトリエル？ って所は魔術が調べられるって事はそれなりに魔術に進んだ国なのか？

「アカトリエル？　は魔術が進んでるの？」

「はい、何でもアカトリエルは昔から魔術の研究が盛んでその力をもってして大陸を支配したほどですから」

おお！　それは凄い。

「でも、危なくなかったのか？　大陸を支配するほどの力を持つてるんだろ？」

「そうでもなかったようです、最高レベルで500程度のエルフの王が出てきたぐらいですね」

「えるふ？　エルフがいるのか？　だったら、アルファルスが王国で魔術を学べるのは分かるな

それにしても、エルフの王族か、会ってみたいな」

スピリットワールドは人間以外にも種族がいてティティーとディーは人間だが、アリスは真祖の吸血鬼だ。

そして、アルファルスはハイエルフだ、ハイエルフはエルフの王族というくらいなのだからその姿だけで受け入れられるだろう。

「はい、ですが、王国は受け入れたのではなく、受け入れさせられた、というのが正しいでしょう」

「どういうこと？」

「はい、どうやらアルファルスはアキヒト様が魔術に興味を示したことでそれについて調べるために魔術王国であるアカトリエルで情

報を収集しようとしたのですが最初は顔を隠していたので追い払われたそうです

その仕返しに、王都の隣に王都と同じサイズのクレーターを魔法でつくり、魔術書を見せなければ国を滅ぼすと脅したそうです」

何やってんの、あの子は、めちゃくちゃすぎるよ!!

「何でそんなことしたんだろう？ 顔見せれば普通に入れただろ？」

「何でも、まだアキヒト様にも顔を見せていないのにそこの有象無象に顔は見せれないと」

他のやつは!! 他のやつらはどうしてる？ まさか!!

「まさかと思うけど、他の八人は大丈夫だよな？」

「他の八人も顔を出していませんがそれほど無茶はしていないと思います」

思います、なのか、もしかして無茶やってるかもしれないってことか？

俺はものすごく不安だよ、もう考えないようにしよう。

「そうか、無茶してないと、良いなあ…… うん、それじゃあ、アリス魔術の指導お願い」

俺は、すこし遠くを見つめ、すぐに気を取り直して、アリスに言う。

「うむ、分かった、それでは外に出るぞ」

アリスに慈愛のこもった目で見られた、嬉しかったけどなんだか泣きたくなった。

昨日魔法の練習をした場所に来た。

「それでは妾も完璧ではないが妾の知りえたことを解説しながら実際に使って主に教えていくのじゃ」

解説ばかりじゃあつまらないし、実際に使って見せてくれるってのはいいな。

「では、まずは魔術の種類について説明していくのじゃ」

「魔術には種類があるのか？」

「うむ、といっても2種類じゃ、よく使われるのは詠唱魔術じゃな、呼んで字のごとく詠唱によって魔術を発動させる方法じゃ

そして、次にルーン魔術じゃ、こっちは力ある文字により魔術を発動させるのじゃ」

ふむふむ、どっちもそれっぽいな。

「質問なんだが、俺がやるのはよく使われる詠唱魔術の方か？」

「いや、ルーン魔術の方じゃ、そもそも詠唱魔術はルーン魔術の力ある文字を声に出して呼んで使う、そのため研究をするなら詠唱魔術よりルーン魔術の方がいいのじゃ

ちなみに詠唱魔術のメリットはルーン魔術より圧倒的に簡単に発動させられることじゃ、元が戦争のために作られた魔術じゃしの

まあ、実際にどちらとも使って見せよう」

《光よ我らが光よ我に道を示したまえ》

するとアリスの右上に光の玉が出来る、ランプの魔法と似ている。そして次はアリスの左上に魔力で円が描かれそれに文字が刻まれていく、そしてそこに光の玉が出来る。

「まあ、こんな感じじゃ、詠唱魔術は複雑な魔術になればなるほど詠唱が長くなるという欠点があるのじゃ

ルーン魔術は正確な魔力操作をして円を描きその中に文字をかくことが出来なければ発動しない、これがルーン魔術の欠点じゃ、研究用にするにはまったく問題ないがの

まずは、正確な魔力操作が行えないとどうにもならん、というわけです。主よこのように魔力で円が描けるようにするのじゃ」

そういつてアリスは目の前に魔力で円を描く、俺もまねをして魔力で円を描いてみるが、うまくいかない。

「主よ魔力は自分の手足と変わらぬ、魔力はイメージによって簡単に動かすことが出来るのじゃ

魔力操作は慣れれば呼吸をするのと変わらないほど簡単に出来るようになる、感覚で描けないのであれば、道具をイメージすればよい、そうすればイメージに補正がかかる」

イメージか、円を描くならコンパスだろ、コンパスを思い浮かべる、そしてそれを使って円を描く。

少し歪だがさっきよりましな円が描けた。

「うむ、イメージがうまくいったようじゃな、慣れれば道具を思い浮かべなくてもかけるようになるじゃろう
しばらくは、この円を描く練習じゃな」

基礎は大切だしな、がんばるしかないか。

そして、延々と丸を描き続け低たらいつの間にか日がだいぶ傾いていた。

円の方はコンパスを思い浮かべてゆっくりなら10回中10回とも成功した。

早く描こうとすると10回中5回は失敗する、コンパスを思い浮かべなければ成功したのは10回中1回だけだった。

「主よ、だいぶ成功するようになったの、しばらくは研究にしか使わんのじゃろ？」

今日は日も傾いてきたし主も疲れとるじゃろ、家に帰らぬか？」

「ああ、そうだな、今日は疲れたしそろそろ帰るか」

結構、集中力を使ったから精神的にも疲れてきたし、家に帰ったら早く寝たいくらいだ。

「それでは、アキヒト様、帰りましょう」

ティティーが俺の手をとって引いてくれる、眠くてすこし舟をこいでいる。

そんな感じで、帰路につくのであった。

3話（後書き）

誤字脱字の報告、感想などいただけたらうれしいです。

4話

アリスの魔術講座から7日がたった、魔術については分割思考というものがあるとアルファルスの報告がありそれを使って練習している。

分割思考を使うことで、何かをしながら魔術の練習が出来るので俺は周りに常に円を描き続けている。

それのおかげか、かなり速度で円が描けるようになった。

「ふむ、主ももう基本魔術陣のほうは完璧のようじゃの、そろそろ、文字刻みを始めるかの？」

「文字刻み？ まあ、なんとなく分かるけど」

「主の考えている通りでいいと思うぞ」

アリスはそういった、ということは本格的に魔術が使えるようになるのかな？

ちなみに文字刻みってのは魔術陣の中に文字を書くことだった、思った通りだな。

「アキヒト様、王都に送っているステイファンより報告がありました
アキヒト様が頼まれていた屋敷の購入が出来たと、それからレベルが上がる事が確認できたそうです」

むむ、レベルは上がるのかということは向こうの世界でのレベルの上限は関係なくなるということだろうか？

「そっか、他の九人はどうだ？」

「他のものたちも派手な戦闘行為はしてないので経験値はそんなに獲得していないので未確認です」

派手な戦闘行為はなかったのか、まあ、派手に暴れてもらっても困るが。

「それにしても、屋敷が手に入ったか、それじゃあ王都に移動するか？」

「そうですね、このログハウスも手狭ですし、アキヒト様にふさわしくありませんから」

そ、そんなことないぞ、このログハウスでもかなり広いと思うぞ、現代の一軒家ほどあるし。

「うむ、まあ、王都の屋敷に移動するのもいいかも知れぬな、王都までは歩けば3時間ぐらいじゃな」

確か、人間の歩く速度は1時間に5キロ弱位だったかな、王都まで10キロで距離を考えれば疲れとかで遅くなったとして余裕を見て3時間といったところかな。

思考があまっていたのでどうでもいいことを考えながら魔術陣を回りに描きつつける。

「うーん、そうだね、そういえば王都に行く途中に魔物が出てくるよね、それを魔術の実験台にするってのはどうだろう？」

「うむ、そうじゃのう、魔術なら近づくずに攻撃が出来るから怪我もせんじやろうからレベル上げにもなるからよいかも知れんな」

うんうん、それじゃあ、結構急だけど準備を整えたら外に出よう、あんまり外には出ないから楽しみだ！！

「ティティー準備をお願い」

「分かりましたすぐに整えます」

そういつてティティーは部屋から出て行く。

準備が終了し、家を出てもう少しで街道に出る。

「街道に出れば後は道なりに進むだけなんだよな、王都かゝ楽しみだな」

うきうき気分である、異世界に来てほとんど家の中かちよつとだけ森に入るぐらいだったからな。

向こうでは海外旅行とかした事ないし異世界だが違う国に行くとするのは浮ついてしまう。

ガサッ ガサ

「主よ、ホーンラビットのようじゃ、ちょうどよいさつき教えた炎のルーンを使ってみるのじゃ」

草むらから飛び出してきたのはホーンラビットという魔物だった、外見は大きなウサギに角がついただけといった感じだ。

だが油断することなかれ、その角で思いつきり突かれれば人間な

ど簡単に穴が開く、丈夫な角と異常な突進力があればウサギだって立派な魔物だ。

アリアに教えてもらったのは炎を出すだけの魔術で火のルーンを魔術陣の真ん中に大きく描くだけだ、そんなに魔力を使わずに発動させたのに桁外れの威力がでたそして、あつという間にホーンラビットは丸焦げになった。

「丸焦げになったな、そんなに魔力使っていないのに威力強すぎじゃないか？」

「それは仕方ないじゃろ、アルファルスがいつておったが、この世界の人間は総じて魔力の質が荒い、故に魔法が使えるものが少なく魔術などというものを作り上げたらしいのじゃ

魔法にしても魔術にしても魔力の質が高ければそれだけで威力が上がるのじゃ、そして、主がユースティティアから供給されている魔力は最上級の質をもっとるからの」

電流と電圧の関係みたいなものか、魔力が多くても魔力の質が悪いと弱くなるといった感じかな？

「魔力の質はどうやって決まるものなんだ？」

「血統じゃな、そして次に魔力を目覚めさせるものの魔力の質に引っ張られたりもするの」

血統なのか、ということは血は大切にされる世界と思っていいのか、魔力の質のせいで王族と間違われるとかになったらめんどくさそうだ。

それにしても、魔力の質で魔法が使えるか使えないかも決まるんだよね？

「魔力の質は魔法が使えるか使えないかに影響するんだよね？　この世界で魔法が使えるやつは少ないようだけどやっぱり王族とかが多いのか？」

「うむ、王族は魔力の質がそれなりに高いそうじゃ、そして魔法を使えるのもほとんど王族らしいと聞いておる」

ああ、そういえば、王都に送ったステイファンは騎士だけどその前は魔法戦士だったんだよね。

魔法戦士のビキニアーマーに釣られて、職業選択したしな、と、ここまで考えて思ったことがある、もし、もしだ、ステイファンが人前で魔法を使えば少し大変なんじゃないか？

魔力の量と質、共にこの世界ではかなり高いだろう、変なのに目をつけられてないといいけど。

「アキヒト様、止まって下さい、ゴミに囲まれたようです」

「ゴミ？」

俺が疑問を口にしたのと同時に

ガサツ　ガサツ　ザツ　ザツ　ガサツ　ザツ

草陰から20人ほどの人間が出てくる、いや、何人かは獣人だろう、耳があるし。

「ゴミとは言ってくれるじゃないか、まあ、小奇麗なあんたたちから見れば私達なんかゴミのように見えるのかもしれないけど」

これは俗に言う山賊というやつだろうか？ 剣を持った男達とリーダーぽい女の白い耳と尻尾の犬、もしくは狼の獣人。

「くさいのじゃ、寄るな、消え去るがいいゴミども、特に貴様じゃ獣臭い我の一番嫌いな匂いじゃ」

なんだか怒ったように相手を挑発するアリス、どうしたんだ？

「はっ、どこの貴族様か知らないけどそんな大口いつまで叩けるかな？ 野郎ども、やっちまいな！！」

なんという、やられ役の台詞なのだろうか、ある意味感動した！！それにしても貴族様か、確かにアリスの格好はそれっぽいかもしれない、ゴスロリというのだろうか？ 黒を基調とした丈の長いドレスに白いレースそして、フリルをふんだんに使いドレス自体は半袖だが腕まで覆う手袋によってほとんど肌の露出はない。

そしてその手袋と、服の袖との間にのぞく白い肌が凄くきれいだ、手に持つ黒い日傘も黒と白のレースとフリルでドレスとおそろいだ。ちなみに、俺はローブを着てフードを被っている、このローブはただのローブじゃなく自動防御が付加された魔法のローブなのだ。

「はあ、ブンディー任せたのじゃ」

「はい」

アリスがため息をつきディーに命令する、するとどこからともなくディーが現れ、襲い掛かろうとしていた男達の首が飛んだ。

やばい、グロ！！ 血の匂いがきつい、気分が悪い、吐きそう、俺は口を押さえてへたり込んでしまう。

「ど、どうしたのじゃ、主!!」

「いや、血の匂いが、目の前で人が死ぬのって初めてだし」

あゝ、やばい、頭ががんがんする、吐き気が凄まじい。

「アキヒト様、大丈夫ですか!」

ティティーが抱きしめてくれる、パスが太くなりティティーの体験? というか経験みたいなのが流れ込んでくる。

それと同時に、山賊は人を襲い殺すのだから今回のことは自業自得で仕方ないと思えるようになった。

「ティティーありがとう、ディー、他の人は殺さないように倒して」

「分かった、殺さないように、倒す」

そういった、ディーの姿が消えたかと思うと周りの人たちが次々に倒れていく。

「終わった」

さすがだ、ぜんぜん見えなかった、心が浮つく魔力供給で酔っているみたいだ、精神が高揚する。

高揚する精神を抑える、深呼吸だ、すってー、はいてー、何度か繰り返すとちよつと落ち着いた。

「ディーありがとう、ティティー、山賊って手土産になるかな?」

「そうですね、山賊などは大抵賞金を掛けられているのでなるでし

よう」

「そういえば、山賊とかそういうのはどうやって調べるの？」

山賊じゃないやつ捕まえてこいつは山賊だって言ったらどうなるんだろう？

「基本的に犯罪を犯すと魂に刻まれます、それを特殊な魔具を使って調べることによって見分けます」

「犯罪って、結構アバウトだね、そんなんでいいの？」

何が罪で何が罪じゃないって時代によって変わると思うけど？

「犯罪となるのは王家やその国そのものが決めた法律が書かれた物に書かれていることです

法律は王や国の意思で書き換えることが出来るそうで、そのときの法律によってどのようなことが犯罪になるか決まっています
ちなみに王都の法律では犯罪者を殺すことが認められていますので、ブンディーが山賊を殺したことは罪には問われません、つまり魂には記録されないということです」

えらく、便利だな異世界。

「うーん、それじゃあ、捕まえた犯罪者を拷問とか人体実験に使ったりしたらどうなるの？」

「そうですね、基本的に犯罪者に権利などなくどのように使おうと捕まえた人間の勝手になります

軽犯罪であれば現行犯で捕まえない限りしばらくすれば魂に刻ま

れた罪が流されますので現行犯で捕まえなければ使えませんが」

厳しいな、異世界、というか軽犯罪でも現行犯で捕まればどんなことされても文句言えないとか怖すぎ。

「ふうん、そっか、それじゃあ、このリーダーぽい子は実験に使うから渡さないでね」

ああ、楽しみだな、魔術を体に刻み込んだらどうなるんだろう、確か魔術陣自体は魔力で描かずに紙にインクで書いても魔力を通せば使えるって言ってたから体に刻み込むのも有効だろう。

「分かりました、それでは王都に着いたら奴隷としましょう」

奴隷とかもいるんだ、くふふふ、それだったら実験には困らないな、くふふふ、あはははは、笑いが止まらない、ああ、楽しみだなどうなるのかな、早く実験したい。

「アリス、王都につくまで魔術をもっと教えて、特に知りたいのは身体強化系とかかな」

そして王都まで、アリスに魔術を教えてもらいながら移動した。

5話

山賊を捕まえてから、1時間半ほど歩き王都に着いた、門のところで捕まえた山賊を渡し、王都に入った。

王都の中は人が多い、少しきよろきよろと見回してみる、俺と同じようにローブを着てフードを被り顔を隠している人もそれなりにいる、この格好は魔法使いなどに多い格好らしい。

もしくはそれなりに有名な人間なんかも御忍びだったりするところな格好をするらしい、魔法使いと見分けがつかないしちようどいいらしい。

「ティティどこに向かってるの？」

「ステイファンが購入したという屋敷に向かっています」

屋敷かー、どれぐらい大きいんだろうか？ 頼んだのは地下室が

あつてとにかく広い家って頼んだんだけど。

そんなことを考えながら他の思考で目に映るもののを考える、シーステリア、山賊のリーダーだった獣人だ。

今は奴隷にしたので喋らすと汚い言葉ばかりいうので喋らないように命令してる。

それにしても、パスによって興奮していてあんなことを言っしまったけどどうしよう！？ 奴隷にしちゃったし……、と他の思考では焦っている。

「たつのしみだなー、どんな家なんだろう？」

「かなり広い屋敷だと聞いてます、元々は大貴族の別荘だったらしいですが、広すぎて管理が面倒になり売られたとの事です」

「そっか、そっか、かなり広そうだな」

管理が面倒になるぐらい広いらしい楽しみだ、それにしてもシーステリアをどうしよう？

他の思考も使って考えているのだが、考えはだいぶ決まってきた。
いる。

それは、最初に言ったとおり実験の道具として使うということだ、
実際考えて考えて考えたのだが俺はこの世界に来てなぜか若返って
おりその影響が少し、いや、かなり性欲が戻ってきた。

実験に使いながら、そういうことに使うおもちゃとしても使おう
と考えているのだ、こんなことを考えてしまうなんて、向こうの世
界では考えられないな、だいぶこの世界に染まったのか？

いや、そうじゃないな、この急激な変わり様はティティーとのパ
スによる変質そして、もともと俺にあった素質が原因といったこ
ろか？

「アキヒト様、屋敷につきました」

考え事にふけつているといつの間にか屋敷についていた。

目の前には高い門8メートルはあるだろうか？　そして右を見て
も左を見ても続く塀、どこまで続いてるんだろう？

「ティティー、この塀はどこまで続いてるんだろう？」

「申し訳ございません、そこまで把握しておりませんが、お
そらく王都の4分の1は屋敷の敷地だと思います」

そっか、広いな……、はあ……うん、あれだね、何でそんなに
広いだよ！！　いや、ある意味、要望どおりだけど広すぎだろ。

と一人心のなかでツツコミを入れるのだった。

「むう、まあ、とにかく入ってみよう」

門の奥には森が見える、かなり歩かなきゃいけないのかな？

「アキヒト様、転移しますか？」

転移それは素敵な魔法、指定すればどこにでも飛べる、そんな魔法です！！

ハッ！ 歩かなくていいと思ったらテンションが上がってしまった。

「そうだね、玄関前まで転移して」

「分かりました」

《転移》

そうティティーが唱えた瞬間には屋敷の玄関の前に立っていた。やっぱり魔法はめっちゃくだと思う、シーステリアも口をパクパクさせて何かをいいたそうにしている。

ティティーが開けてくれた扉をくぐり屋敷の中に入る。

「ようこそ、アキヒト様屋敷はどうでしょうか？ 気に入っていただけたでしょうか？」

屋敷の中に入ると玄関で待っていたのか、すぐにステイファンが近づいてきて膝をつき、屋敷について聞いてくる。

「むむー、思ったより大きかったけどいいと思うよ、それから、名前はスティーって呼んでいい？」

誰であっても愛称をつけるなら確認は必要だと思っているから、聞いておく。

「はい、問題ありません」

「そっか、それじゃあスティー、真っ暗な地下室に拘束してあの子を閉じ込めて来て」

俺はそういつてシーステリアを目で見て言う。

「あれは？」

「来るときに襲ってきた山賊、今は奴隷だけど」

これからの予定をいくつかの思考で考えながらまとめていく、少し反抗的なシーステリアは精神的に責めてみる事にした。

真っ暗な空間というのは人間にとって中々つらいものらしい、うまくいくといいな。

「了解しました、すぐに連れて行きます」

そういつて、デイーからシーステリアを引き取るスティー、少し頼みごとをして、シーステリアを連れて行ってもらう。

その後、アリスにひとつ気になったことを聞く。

「アリス、シーステリアのことが嫌いだったようだけど、なんで？」

「別に嫌いというわけではないのじゃ、ただ獣人だったから玉藻とかぶって少し挑発してしまっただけじゃ」

玉藻、アリスと同じ時に作ったキャラだ、正式には白面金毛九尾の玉藻前などという長い名前になっている。

「アキヒト様、アリスティンと玉藻前は同じ時に生まれたので互いにライバル視しているのでそのせいかと」

ティティーがそばに寄って耳打ちしてくれた。

ああ、そういう事なのか、言ってみれば双子のようなものだしどちらが優れているのかもあるのだろう。

気になっていたことも解決したので、あとは談笑しながら、ステイーを待った。

「おまたせしました、アキヒト様、お部屋に案内します」

ステイーが戻ってきた、部屋に案内してくれるらしい、部屋に向かって歩き出す。

「ステイー、ちゃんと頼んだようにしてくれた？」

「はい、少々抵抗されましたが縛り上げて感覚遮断をおこない死なないように点滴を刺してきました」

こんな鬼畜の所業をしても心が痛まないなんてやはり、俺は変質しているのだろう。

「アキヒト様、お部屋につきました」

俺の部屋は結構近かったようだ、もっと奥まったところにあるのかと思ってたよ。

「結構近いんだな」

「申し訳ございません、実は屋敷の管理は私一人では追いつかず奥はそんなにきれいにできてないのです」

ああ、だからか、見た感じこの屋敷はかなり広いから一人で管理なんか出来ないだろ。

「そっか、それは仕方ないよ、それにスティーの本分は戦うことだしな、ティティー屋敷の管理に必要なだけメイドを呼んでおいて」

「はい、分かりました」

スティーを慰め、ティティーに屋敷の管理ができるやつを呼び出すように言うておく。

ティティーが了解したのを聞いて部屋の扉を開く、部屋の中は扉から正面に高級そうな机——社長室にあるような机——がありその後ろには窓があり外の光を取り込んでいる。

そして右には様々な本が並べられた本棚、左はどこの王様のベットだと言いたいくらいに大きいベット普通に8人くらい人が寝れそうだ。

「おっきいな」

ベットを見て素直な感想、そして、8人も寝れるなら大人数でも

イタすことができる、じゃなくて、何考えてんだ俺？

「アキヒト様、契りますか？」

後ろから腰に手を回し俺に抱きつくようにして耳元で囁くティティ、今背筋がフワツてした。

「いい、それよりも王都を見てみたい」

「そうですか、分かりました、すぐに出ますか？」

俺から残念そうに離れ、確認してくるさっきまで外にいたのでそのまま出られる。

「うん、すぐに出る」

「アキヒト様、王都の案内は私に任せてください」

スティーか、確かに少しとはいえ俺たちより早くここに来てるから案内を任せるのもいいだろう。

「ん、それなら頼んだ」

「はい、お任せ下さい」

騎士だしかったいい系の美人だからよく似合うキリツとした顔で言うスティー。

ティティーにはメイド召喚があるので家で留守番、アリスも目立つので留守番をしてもらう、スティー、そしてどこにいるかわからないディーを護衛にして外出する。

6話

「ステイーこれは何？」

見たことのある赤い果実でもこっちの世界では名前が違うのだろう

「はい、それはリリゴの実ですね」

どこからどう見てもリンゴだ、名前が違うだけなので味や形は変わらないこれは異世界といっても俺の世界で作られたゲームの世界に近いからだからだろうか？

「ふーん、そっか、それじゃあこれ買って」

「はい」

異世界情緒に溢れた街並み、ついさっきステイーに買ってもらったリリゴ、ややこしくなりそうなのでリンゴを食べながら歩く。

周りが少しざわざわしている、どうかしたのだろうか？ 少し周りに耳を傾けてみる。

「おい、あれって最近有名になってきたステイファンじゃないのか？」

「確か、王家に騎士団に入らないかと言われたが、主がいるので断ったっていう？」

「それじゃあ、あのフードをかぶった奴が主か？」

面倒な事になってる、無視の方向でいこう。
外もだいぶ暗くなってきたしそろそろ帰るか。

「ステイーさん！」

後ろからそんな声が聞こえてくる。

振り向いた先にいたのは頬を赤く染めステイーを見ている15、
6の女の子だ、ローブを着ているので魔術師だろう。

ステイーの名前を呼んで見ているのでステイーの知り合いか？

「ステイー、誰？」

「え？ あ、はい、彼女はユノファイゼドと言います、冒険者ギルドに入った最初の頃にパーティーを組んでいました」

ステイーは少し慌てて早口に言い切った。

「ステイーさん、と？ えっと、誰でしょう？」

近づいてきたユノファイゼドがこちらを見てステイーを見る。

「ユノ、こちらの方は私の主だ、この前言っていたら？」

「そ、そうなのですか？ は、はじめましてステイーさんにはいつもお世話になっていました

ユノファイゼドと申します！」

勢い良く腰を曲げ頭を下げるユノファイゼド。

「うん、よろしく、俺は佐々木明人だよろしく」

「はい、ササキアキヒト、さん？　少し異邦人の方の名前に似ていますね」

異邦人？　何だそれ？

「えっと、アキヒトって呼んでくれればいい、それより異邦人てなに？」

「はい、アキヒトさん、えっと私もユノでいいです
それで、えっと異邦人について知らないんですか？　異邦人はそれぞれ特別な知識を持っていたりするので大抵どこに行っても保護をされるのですが、そういうえば最近では王城にサノガワサクラ様が保護されています」

異邦人てのはもしかして地球人？　いや、日本人か？　名前の感じが似ているといっていたし。

それにしても、サノガワサクラか……いや、珍しい名前じゃないよな？　でも、もしかしたら

「今、王城にいるサノガワサクラ様はこの世界のモンスターに詳しく効率のいいレベル上げを知っておいででそのおかげで私は1日で5レベルも上げれましたよ」

モンスターに詳しくて効率的なレベル上げを教えれる人間？　それってプレーヤーか？　いや、それしかないか。

だったら、あの子の可能性がかなり上がるんだが……

「そっか、効率的なレベル上げね、それってもしかしてピリニアの群れに血袋を投げてピリニアがその血袋に夢中なうちに全てを狩る

とか？」

ピリニアとは蛇みたいなモンスターで血に反応して血を流しているものを真っ先に狙い食い散らす。

その習性を使って群れに血袋を投げその血袋に夢中なうちに狩る、これはアニマクリエイトでも初歩の初歩のレベル上げだ。

「は、はい、よく知ってますね、サノガワサクラ様もよくこんな方法を知っていたなと思いますよ

だって、ピリニアの群れと遭遇したらレベルが高くないと逃げられないのにこの方法なら私でも出来ました」

でもこのレベル上げの仕方は正直あまり進められないなぜなら、ピリニアを倒しているときに返り血を浴びてそれに群がられ死亡というのがよくあったからだ。

もしあの子だとして、こんな方法を教えるだろうか？ 普通に教えそうだな、あの子は効率重視のプレーヤーだったし。

「あんまりこの方法はオススメしないよ？ だって、ピリニアは血を好むたとえそれが同族の血だとしても、もし返り血をかなり浴びてると自分に群がられるよ？ まあ、血袋をいっぱい持っていけばそれを囷にできるけど」

「た、たしかに危険な方法かもしれませんがこんなに簡単にレベル上げができるんですやらない手はないでしょう！！」

「それで命を落としてもしょうがないと思うけど、うーん、それじゃあスティー、ユノが死なないようにサポートしてあげて俺としては迷宮の攻略が目的じゃないし」

ユノは魔術師のようだから、俺が作った魔術をスティーから流してどれだけこの世界の人間が魔術を使えるか調べるのに使えそうだし、死んでもらうのはもったいない。

「いいんですか!？」

「いいよ、その代わり俺が作った魔術がどれだけ使えるか実験して欲しい」

「魔術の実験ですか？ それは構いませんが自分で調べたほうがいいんじゃないですか？」

うーん、どうやって説明しようかな？

「俺は開発専門で実践はあんまりなんだ、実践に出ようとしたら心配性な部下が絶対に止めるし」

「そうなんですか、分かりました頑張ります!」

「まあ、そんなにポンポン魔術はできないからできたときに試してもらっただけだから気楽に考えてね」

実際どれだけ作れるかわからないわけだし。

「はい!」

「それじゃあ、もうだいたい暗いしそろそろ帰ろう」

「はい、アキヒト様、ですがその前に少しよろしいでしょうか?」

「うん、いいよ」

俺がそう言うのとスティーはギルドカードを取り出す。

「ありがとうございます。ユノ、パーティー登録をしておこう」

パーティー登録、確か登録した者どうしならギルドカードで連絡が取れるとかだったか？ 他にもあった気がするが忘れた。

「はい、スティーさん」

ユノもギルドカードを取り出してそのカードをスティーのカードと重ねる、するとカードがかすかに光る。

「問題なく登録できてるな、それじゃあ、ユノ何かあったらギルドカードで連絡してくれ」

「分かりました、スティーさん」

「それでは、アキヒト様帰りましょうか」

スティーに促され帰路に着く。

「おかえりなさいませ、アキヒト様」

出迎えてくれたのはティティーだ。

「うん、ただいま、シーステリアの方はどうなってる？」

「圧縮時間3日ほどでほとんど壊れました、自分の声さえ届かないことが精神的に耐えられなかったのでしょう

今は時間を平常に戻し下級メイド3名に世話をさせています、それにさえ気づけてないでしょうが」

圧縮時間、特殊な魔法で時間の密度を上げることができる、ゲーム内では魔法の習得などをするときにこの魔法を使うと魔法の習熟が早くなるという魔法だった。

この世界では時間操作の魔法みたいだ。

「そっか、それじゃあそろそろ会いに行ってみようかな?」

「はい、おとします」

そういう、ティティーを連れて地下に降りていく。

ギシギシと木の椅子が軋む音がする、うゝ、うゝと唸る声が聞こえる。

椅子に縛られ拘束衣を着せられ目隠しをして口にはさるぐつわを噛まされている。

「ほんとに真っ暗だね、暗視の魔法か、魔術を使わないとなにも見えない」

この部屋には光がつかないという概念があるために明かりになるものを使えない。まあ、そんな事どうでもいいのだが。

「それじゃあ、ティティー、シーステリアの感覚遮断を一部開放して俺だけを認識できるようにして」

「はい」

特に何かが変わったという感じはしないが足音を立ててシーステリアに近づいてみる。

「うう！！ うゝゝ、うううう」

ギシギシと椅子を鳴らし体を揺さぶる今まで音も感覚もなく過ごしていたから音に反応したのだおろうか？

「どうしたの？」

「ううう！ うううううう！！」

なに言ってるのか全然わからない、仕方ないのでさるぐつわを外す。

「たすけて、たすけてください！！ もう反抗しません、だからだからああああ

声が、声が聞こえないよゝゝ自分の声なのにあああああああ
あ」

最初は懇願していたが、懇願している自分の声さえ聞こえなくて叫び始める。

「大丈夫？ そんなに自分の声が聞こえないのが怖い？ 仕方ないなそれじゃあ聞こえるようにしてあげるよ」

ティティーに目配せする。

「あああああああ、ああ？ 聞こえる、私の声聞こえるよ！！
あははは、聞こえりゅう、聞こえるよお」

頭がおかしくなって幼児退行でもしたのか？ 少し面白いが。

「うるさい黙れ、黙らないとまた聞こえなくするぞ」

「ひっ！！ ごめんさい、だまりましゅ」

シーステリアはからだを固くして動きを止めた。

シーステリアと向かい合うようにその太ももに座る、椅子が結構大きめなので横の余った部分に膝について中腰になりながら目隠しを取る。

「うんうん、いい子いい子、これから奴隷としてのしるしをつけるから少し痛いかもしれないけど我慢できるよね？」

シーステリアは涙目で首をブンブンと縦に振っている。

「とりあえず、うるさくしなかったら喋ってもいいよ、痛かったら言ってね」

そういつて俺はシーステリアの拘束衣のチャックを開けて肌を露出させみぞおち辺りに手を当てて針ほどに細くした魔力を打ち込んでいく。

「う……ん、くっ、ん……あっ、ん！」

シーステリアは痛みに耐えているようだ、時折はあはあと息を乱していらたが、1時間ほどかけて出来上がった。

刻まれているのはランタンだ、大抵奴隷に刻むのは家紋だったりするのだがそんなものないので名前から明かり関係で考えてこれになった。

ちなみに魔術陣でもあるので魔力を流すと鎧生成と身体強化ができるようにしてある、さすがに俺一人ではそんな魔術作れなかったのでティティーやアリスに協力してもらった。

「きれいにできたかな、とりあえず魔力を流してみて」

「は、はい」

シーステリアの魔力が流れたのだろう、みぞおちの部分に魔術陣が浮き出てくる。

「もういいよ、それじゃあ、今日はここで終わりかな、シーステリア、いや、テリア、似合ってるぞ

これからお前は俺のもので俺のために生きるんだ、わかるな」

「はい、はい！」

首をブンブンと縦に振りながら言う、こいつかなり面白くなってる。

「それじゃあ、お前の教育係を連れてくるから少し待ってろ」

「はい、分かりました！」

俺はテリアから離れ扉を開けて外に出る、外には既に3人のメイドたちがいた。

「はじめまして、アキヒト様、私は下級メイド月耀型^{つきよう}、3ー50です、よろしく願いします」

月耀はできる女といった感じで、月と同じ色をしたストレートの膝ぐらいまである長い髪がきれいだ、身長はティティーと同じくらいか、月耀はスカートの端をつまみながらちよこんとおじぎをする。

「同じく、下級メイド火耀型^{ひよう}、3ー00です!!」

火耀は元気がいい、真っ赤な髪ショートカット、身長は俺と同じくらいだ、こちらもスカートの裾をつまみおじぎする

「私は、下級メイド水耀型^{すいよう}、3ー00と申します」

水耀は落ち着いた感じだ、青のウェーブの掛かった髪を腰まで伸ばしている、身長は165くらいかな、スカートをつまみおじぎをする。

ちなみに3ー00とかはレベルのことだ。

「月耀に火耀そして水耀か、よろしくな、やってもらいたいのは中にいる奴に番犬としての教育をして欲しい
とりあえずは魔力を整えてメイドとしての教育をしてくれればいいかな、まあ、とりあえず入ろう」

「「「はい」」」

3人を連れてまた中に入り、テリアに3人を紹介して今日は終わ

りにした。

明日はテリアの強化に魔術陣をからだに刻みこむつもりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1746y/>

アニマクリエイト

2011年12月2日15時49分発行